

氏名(本籍)	山本恒次(千葉県)
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第431号
学位授与年月日	昭和63年2月29日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	哲学・思想研究科
学位論文題目	実践的叡知と豊かな人間愛
主査	筑波大学教授 文学博士 高橋 進
副査	筑波大学教授 文学博士 湯浅 泰雄
副査	筑波大学助教授 Ph.D. 荒木 美智雄
副査	筑波大学助教授 教育学博士 山本 恒夫

## 論 文 の 要 旨

本論文は、社会的人間形成の過程を明らかにし、併せて利己性の強い人間自体が社会の実生活に展開される複雑な人間関係において、如何にして自らの人間性を回復しつつ当面する社会の矛盾と困難を克服し、建設的に平和と福祉を実現するか、を主要な課題とし、その解明の為に実践的叡知に基づく人間愛の諸相を種々なる角度から究明し、これを系統的・体系的に論述しようと試みたものである。著者によれば、それは新しい角度より実践倫理の本質的究明を意図した倫理学分野の一体系であり、「人間形成の倫理学」ないし「道德教育学」とも名付けられるものであり、更に社会教育学の分野にも密接に係わるとされる。論述は、序文に続き、全体を2編に分け、合わせて13章をもって構成し、これに結論を付している。

第一編においては、社会的人間形成の基礎的条件を社会的要因と自然的要因に分けて分析的に明らかにし、第二編では、これに基づき道德的实践の本質内容を「実践的叡知と豊かな人間愛」として、その知徳一体的行為の価値と実践の論理を詳述し、最終的に著者の意図する自己確立への道を論じたものである。従って、著者も述べているように、本論文は従来の倫理学分野において一般的にみられる如き東西の倫理学説ないし倫理思想の歴史的解明を主とする研究や、純理論的に倫理・道德上の諸概念をその本質の上から論ずる研究等とは全く異なり、どこまでも人間の日常生活の実態に観察の目を向け、そこに貫かれている倫理、道德の事実を考察し、更に多人数の経験的立場から検討し、その行為に表現される実践上の価値を究明している。著者はこの立場を、和辻倫理学における「倫理は事実そのものに帰れ」という態度と軌を一にするとしている。しかし著者はそれに止ま

らず、更に一步を進めて、凡そ存在する倫理が国家、社会に生ずる人間関係において道徳として表現される場合、どのような心情と行為が価値ある自他の協調・連帯と心身の安定を導くか、或はその精神作用、行為が自己の生きがい、更に社会の平和と福祉の実現にどの程度関与するか、その実践上の価値の究明を試みている。以上は本論文における著者の全体的立場と方法に係わるものである。

第一編第一章から第五章までは、社会的人間形成の基礎において、各々異なる社会的人間成立の過程を四つの要因に分析して究明している。即ち、(1) 自然環境が人間に及ぼす影響、(2) 社会的・文化的環境が人間に及ぼす影響、(3) 遺伝及び家庭環境が人間に及ぼす影響、(4) 人間の主体的意思に基づく精神作用、行為の影響、がそれである。著者によれば、以上の四要因は相互的には密接な関係にあって、人間形成に係わるのは言うまでもないが、この第一から第三までの条件は、如何なる人にも人間形成上の先行的存在でありながら、後天的に大きく影響する人間形成上の要因であり、そして、第四の主体的意思に基づく精神作用、行為は、第一から第三までが外部的要因であるのに対して、個体の内面から生ずる自発的な内的要因であり、いわば外部に生ずる環境との交流対応のうち自己自身を形成していく最も重要なものであり、これこそが人間に個人差をつくる極めて重要な要件であるとする。

第六章、第七章では、実生活における道徳的行為と人間形成及び実生活における実践的叡知に基づく品性と人間形成について論じ、特に従来倫理学説における道徳的行為に係わる動機論、結果論を厳しく批判し、著者の道徳論を明確に打ち出す。即ち、道徳的行為を発動する完全なる精神作用は、動機・目的を含むはもちろん、人間行為の原動力たる知覚・認識・感情及び意志の如きすべての精神的機能の発動状態を包含してみることを必要とし、一つの道徳的行為に発動する精神作用はその動機及び目的の善なるとともに、時々刻々に進み行く実践の方法並びにその行為の完了に至るまでの精神過程がすべて連続的に善意に満たさねばならないとし、人間としての価値ある生き方とその実践の過程を詳論する。

第二編第一章では、人間実生活の矛盾の解決には、根源となる人間性の究明を旨とし、人間性に関する心理学的・倫理的な解明を行い、知情意と衝動が一体となって働く人間現実を前提として、全人的人間形成の立場から人間性回復への道を明らかにしている。

第二章及び第三章では、実践的叡知に基づく愛の本質概念を明確にし、社会における精神生活の盲点を究明しつつ、それを解決する道を明らかにし、その実践の論理を確立している。即ち、その盲点である階級的偏見、民族的偏見、宗教的偏愛に対しては愛の普遍性がその解消に重要となり、社会における非倫理的行為に対しては愛の建設性の重要性を強調する。

第四章では物質生活の盲点を解明しつつ、愛の人間尊重を論ずる。特に「事業経営の省察と愛の人間尊重」においては、経営における科学性とともに企業内の人間関係に論及し、経営における道徳性の問題は経営者をめぐる人間関係に帰せられ、愛の人間尊重の充足によって活力ある経営のエネルギーを導き出すことが可能であることを論述する。

第五章では、社会生活における盲点を明らかにしつつ、人間の社会生活に存在する立体的人間関

係を取り上げ、様々な具体的立体関係に必要とされる人間愛は、感謝・敬愛として、或は慈愛・育成愛として把握されることを論じ、更にその実践の道ないし方途を明らかにしている。

第六章では、混迷する教育社会においてこれを解決する鍵は、著者の構築した体系的な実践的叡知に基づく豊かな教育愛の体得とその実践にあることを論ずる。この章で述べていることは、著者が上来詳論してきた人間形成の倫理学の教育面への適用であり、従ってそれは当然のことながら現在最も求められている道德教育論の開陳であるといえよう。著者は更にこの論を進めて生涯学習的視点に立つ人間教育論を展開し、知行一体的な実践的叡知と人間愛の人類の普遍性に言及しつつこの章を終わる。

結論は、著者が上来論じたところを全体的に要約し、改めて本論文の意図したところと論述の特徴点を明らかにしている。

## 審 査 の 要 旨

本論文は、著者も明確に述べているように、いわゆる倫理学に関する学説や思想の歴史的研究ではなく、具体的な人間現実の諸相を事実として観察し、更に長年に亘る著者の教育的・実践的経験と真摯な思索に基づき、関連する学問分野の諸学説をも適宜批判的に受容しつつ自己の個性的な思想の開陳を試みた点にその特徴を有する。具体的には、第一に、社会的人間形成の過程を解明することによって、個々の人間存在の個別性・相違性の根拠を明らかにし、特に個々人の自由意思に基づく精神作用・行為は最も重要な要因とし、そこから人間としての価値ある生き方とその実践の過程を明確にしたこと、第二に、本論文は著者もいうように人間形成の倫理学ないし道德教育学というべき体系的・系統的な論述を試みていながら、単に抽象的な理論の為の理論に墮せず、どこまでも日常生活における人間現実を直視し、そこに存在する倫理が国家・社会に生ずる人間関係において道德として表現される場合、如何なる精神作用と行為が価値ある自他の協調・連帯と身心の安定を導くか等を、事実から論理、論理からその実践への過程を筋立てて解明したこと、第三に、人間形成の中核となる愛の本質概念を、単に哲学的・抽象的に究明するのみでなく、その愛の諸活動と社会現実の欠陥・盲点との間に生ずる諸現象を考察しつつ、多様な実践的価値を明示し問題解決の鍵としたこと等がその特徴であり、従来の倫理学の叙述に見られない現代的要請に答え得る新しい成果である。

しかし他面において、歴史的な先哲の人間愛の論述については、さらに慎重な考察を要し、また日本人の人間形成論であるならば、例えば神道思想や石田梅岩の思想等にも言及して欲しかったこと、第二編第三章以下において人間愛の諸相が解明される際、なお実践的叡知ないし知性との論理的・有機的関連をも明確になさるべきこと、学校教育と社会教育との関連と両者の相違に基づく生涯教育の視点・具体的方法等を明らかにすべきこと等は、更に著者の今後の研究に俟つところである。

以上、本論文は多少の不備もあるが、全体として所期の目的を達成しており、その成果は現下日本の倫理学・教育学等の関係学界及び教育界に対して具体的な論理や指針を提供し得るものとして評価されて然るべきものと思われる。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。